bethel hospice letter spring

ホスピスだより

tender loving care vol.19

【作品名】
カテドラル界隈
パリ・ノートルダム寺院
【作者】
松友　啓

松山ベテル病院ホスピス病棟
〒790－0833
松山市祝谷6丁目1229番地
TEL　089（925）5000
FAX　089（925）5599
ホームページ　http://www.bethel.or.jp/

医療法人　聖愛会
松山ベテル病院

“苦笑い”と“はにかみ”
～渡邊　綱彦の旅立ちに寄せて～

長男　　渡邊　憲一

「おっと、危ないぞ」と、右足をアクセルからブレーキに移し軽く踏む。
１４０キロを振り切ろうとしていたスピードメーターは、反時計回りに緩やかに１００キロまで戻った。
居住している伊勢から、父が入院している松山へ向かう高速道路上で、「早く帰らねば」と無意識の焦りを感じていたのかもしれない。

一時帰宅の許可をもらった９３歳の父を、病院に迎えに行く。
人生の終焉を迎えている父とは、久しぶりの対面だ。また痩せた。
心配だが、どう声をかけたらいいのか途惑う。父も苦笑い。
母が着せた和服姿の父を車椅子に乗せ病院の廊下を押して行く。
９１歳の母と、介護の軸となって面倒をみてくれている姉が付き添う。
車椅子を押すのは私だが、長男としての責任と役割は、とうに放棄している。
その後ろめたさからか、人目が気になり気分が上ずっている。
すると、「ワタナベさん、かっこいいよ」、「すてきよ」、「おとこまえよ」、すれ違う看護師さんが声をかけてくれる。
ナースステーションから出てきて写真を撮ってくれる看護師さんも。
父が、“はにかんだ”。
そして、すべての看護師さんが、父の耳元に笑顔を近づけ大きな声で話しかけてくれる。
父の耳が遠くなっていることは、息子である私は忘れかけていた。
しかし、看護師さん達は、皆さんが知ってくれている。
「優しい病院だ」と、安心する。

この出来事からほどなく、平成２８年１０月２３日早朝、
父は永眠した。大切な青春時代を、戦争という過酷な運命に翻弄された世代だ。父だけでなく多くの方が、夢や希望を諦め、進む道を曲げざるを得なかった。
笑いたくても笑えない時のあった時代だった。
しかし、母と出会い、最大の愛を母に捧げ、母と共に生き、大好きな一人娘の姉やその家族と一緒に暮らした人生は、最高のものだったと思う。
また、その母と姉に付き添われ、愛情と優しさを注がれた最後の数週間を、父は美しい思い出として空の上に持っていったと思う。
しかし、やはり終焉に向かう生活は、心に囲いを作り、頑なになり、平穏には遠い時も多く過ごさなければならなかったと思う。

息子は、何をどうすればいいのか分からず、ただ空蝉の励ましを言うのみ。
そんな何時までも夢を見ている息子を見て、父も苦笑いしかできなかったのだろう。
その父が、看護師さんに声をかけられて”はにかんだ”。はにかんだのは、心に喜びが蘇ったから。心に温かい風が吹いたから。
この“はにかみ”が現れた瞬間、父は病人の囲いを破り「人」に戻った。だから顔が輝いた。
看護師さん達が、父に生きていることを思い出させてくれた。そして、看護師さん達にもらった“はにかみ”は、人生の美しい思い出を更に輝かせてくれる最高のスパイスとなった。

話は前後しますが、一時帰宅で１泊した後、再び父を病院に送る。
母や姉、そして看護師さんに父をお願いして、私は伊勢に。
高速道路に上がる。
来る時は１４０キロを越すほどアクセルを踏み込んだが、約７時間の帰路は、アクセルを踏み過ぎることはなかった。焦りが消えていたから。
父とは、これが最後かもしれないと、淋しい風が体の中を吹き抜けていくのを感じながらも、心に平安があったから。
それは、父が大好きな母や姉が、多くの時間を一緒に過ごしてくれているから。
そして、父をお願いしている、ここベテル病院の看護師の方々の、父をはにかませた、素晴らしい人間性と人間力によるものでした。
人間の尊厳に接しなければならない看護と言う仕事は、特に精神的に重労働だと思う。
笑顔で、心から、本心で、これらは相当に修練を積み、心構えを強く持たないと出来ないことだと思う。
ここベテル病院には、そういう看護師さん達がいる。
だから、ここにいる父は、最高の思い出を持ち、輝いて旅立てると確信できた。
もう、アクセルを踏み込んで焦る必要はなかったのです。

それだけではありません。
父がいなくなった人生を、これからも歩む母や姉にとっても、最高の力となりました。
看護師の方々のあの笑顔には、旅立つものばかりでなく残されたものにも喜びをもたらす大きな力が込められていたのです。
母や姉が、淋しさを乗り越える力を、「ありがとうございました」。
この紙面をお借りして、ベテル病院の皆さんに感謝と尊敬の念を捧げます。
また私事ではありますが、長男の役割を放棄した私に代わり父に付き添ってくれた母、姉、義兄、二人の甥に感謝します。

もうひとつのリレーフォーライフ　～繋ぐ～

一足先に会場に行ったスタッフが、綱彦さんの灯篭の場所を知らせてくれる。ご家族も応援に駆け付ける。
暗くなった会場に仕事終わりのスタッフがスタンバイ。
私は病棟でその連絡を待つ。スマートフォンのビデオコールが鳴った！サプライズの始まり。
綱彦さんの思いを刻んだ灯篭が灯りを燈す。
「わー綺麗な！これはいい！ありがと～！」
「気持ちは綱彦さんと一緒に歩きますね」
砂がついた灯篭を他部門のスタッフが届けてくれ、受け取ったスタッフが綺麗に手直し。
アロマライトを持って来てくれたスタッフと一緒に部屋に飾る。
穏やかな眠りにつけるように、綱彦さんの思いを刻んだ灯篭が部屋で灯りを燈す。
みんなで繋いだリレーフォーライフ。

（ 看護師　荒木　一恵 ）

昨年３月３日の入院からおよそ１ヶ月。父は人生の締めくくりとなる日々をベテル病院の一室で過ごしました。とても穏やかな毎日だったと思います。

立場を同じくする患者の皆さん、24 時間笑顔を絶やさず接してくれる看護師の皆さんに囲まれ、「ここが自分の終の棲家」 と、ごく自然に理解していたようでした。

趣味で描いたパステル画も廊下に飾っていただきました。このことは、すでに多くの自由を失ってしまっていた父の日常に、文字通り彩りを添えてくれました。自分の絵を心から楽しんでくれる方々の存在を、父は静かに感じ取っていたのです。

「これ（病院に絵をかざること）は値打ちがある」と何度も口にしていました。

今もベテル病院４階の一角には、父の絵が飾られています。父の思い、父の魂がこもった絵です。父は毎日、絵の前に立ち止まってくれる方との対話を楽しんでいるのかもしれません。それは、与えられた命を全うした父に、絵の好きな神様がくださったプレゼントのようにも思えるのです。

表紙のノートルダムの絵の観客の中には、作者の妻が描かれています。「この絵の中には妻がおるんよ」と、照れた表情でピンクのコートの婦人を指さし教えてくれました。

背表紙の詩は、霧の窓という作品を読み、感銘を受けて書にされたそうです。

これらの話は、展示会に足を止めて頂いた方にもさせて頂いています。これらのすばらしい作品展を通して、私達は松友様の人生に触れさせて頂き、また、癒されているのです。

（ 看護師　菊岡　美香 ）

【年間行事】

8月　ビアガーデン
9月　お月見
10月　お祭り
　　リレーフォーライフ
12月　クリスマス
1月　初日の出
2月　お茶会・志ぐれ

8月　ビアガーデン

9月　お月見

10月　お祭り

10月　お祭り

10月　リレーフォーライフ

10月　リレーフォーライフ

12月　クリスマス

1月　初日の出

2月　お茶会

ボランティア募集しています！！

病室へのティーサービスにご奉仕くださる方、病棟のお花やベランダの園芸のお世話をしてくださる方、チャペルでのレクリエーションにご協力くださる方等々。
※「聖愛会ボランティア説明会」(無料) の受講が必要です。心身ともに健康な方で、定期的・継続的に活動いただける方の問い合わせをお待ちしております。
TEL : (089) 925－5000　FAX : (089) 925－5599　E-mail : volunteer@bethel.or.jp
（ ボランティア委員会　担当：森 ）

（お花：ボランティア　福家　馨子）

ホスピス献金をお願いします!!

ホスピス献金は、ホスピス病棟や難病病棟の援助等、(医)聖愛会の諸活動の援助の為に(医)聖愛会に寄付として頂いております。

皆様方の暖かいご支援をお願い申し上げます。

★現金送金 ★
〒790－0833　松山市祝谷 6 丁目 1229 番地
松山ベテル後援会（松山ベテル病院内）
★郵便振替口座★
口座番号：01610－2－25364　　名義：松山ベテル後援会
※「ホスピス献金」として献げる旨と「金額」をご記入ください。

編集後記
今年度は 2 回目のホスピだよりを発行することができました。作成するにあたり、ご家族からの暖かいメッセージを寄せて頂き、とても感動しました。私たちの励みになりました。
患者さま一人ひとりの想い出は尽きませんが、これからも素敵なエピソードをご紹介させていきたいと思いますので、どうぞお楽しみに。

編集委員　坪田・松井・藤田・戸田

2017 年 3 月発行